

ポスト共産党時代は終焉するか

盛田 常夫

10月16日、社会党大会はコヴァチ・ラースローに代わる新しい党首に、ヒラー・イシュトヴァーンを選んで閉幕した。先月号で予告した通り、社会党の幹部会は一新され、30歳と40歳代の幹部に若返った。旧共産党（MSZMP）から現在の党（MSZP）に衣替えした1989年の大会に匹敵する、世代交代が実現した。果たして、これがハンガリーにおけるポスト共産党時代の政治的な過渡期の終焉を意味するのだろうか。

社会党は首相ジュルチャーニィ43歳と党首ヒラー40歳のフレッシュ・コンビに若返り、FIDESZに対抗できる世代交代を実現した。夏のメツジェシ交代劇からわずか2ヶ月、社会党はどん底からはい上がり、新しい人的体制で党の立て直しに入った。この社会党の指導部交代によって、ハンガリーは政治的過渡期を終え、新時代を迎えることになるのだろうか。

対抗馬が辞退

ヒラーの対抗馬と目されていた党内No.2の党首代理スィリ・カタリン（国会議長）は早々と立候補を取りやめ、幹部会への推薦をも辞した。スィリは社会党内の古手・若手を問わず評判の良い政治家だが、9月初めに立候補の意思のないことを表明した。明らかに、メツジェシ交代をめぐる社会党幹部会の完敗とジュルチャーニィ選出プロセスで、いわゆる守旧派と目される党人派に分が悪いことは明瞭だった。地方の党組織指導部選挙でも、旧指導部層だけでなく、中堅の党官僚が苦戦し、若い世代への交代は、突風のように吹き荒れていた。だから、ここは無理に突っ張らないで、自重した方が良いと判断したのである。

もっとも、「守旧派」（党人派）も手をこまねいていた訳ではない。党首選挙では党人派のセケレシュ・イムレ1本に絞り、ヒラーの対抗馬に立てたが、396対152の大差で敗れた。ジュ

ルチャーニィとキシユとの票差より若干縮まったが、やはり「守旧派」の完敗である。

「守旧派」完敗の原因

権力が腐敗するのは、どんな政党でも同じ。閣僚会議国家書記バヤ・フェレンツの名前が、ここ2ヶ月、新聞紙面を駆けめぐった。K&H証券を舞台とする巨額詐欺事件で逮捕されていたクルチャー・アッティラの供述書の一部が、日刊紙Magyar Nemzetに漏洩された。その中に、IT企業Snyergonが閣僚会議の発注を受ける口添えに、バヤに数度にわたって数千万Ftの現金を渡したという部分がある。供述はかなり詳細で、バヤがお金の催促のために、クルチャーの家まで取りに来たという下りまである。これはクルチャーの詐欺事件とは直接関係のない、いわば贈収賄にかかわる政治資金の受け渡しであるが、クルチャーが国会議事堂や議員会館に自由に入出りできるパスを持っていたことを考えると、クルチャーと社会党の一部幹部との間に、かなり親密な関係があったと想像できる。内務大臣ランペルト・モーニカの亭主が、クルチャーに資金の運用を依頼していたとFIDESZが盛んに攻撃していたことも、記憶に新しい。

火のない所に煙は立たぬ。権力慣れした社会党幹部たちが、訳の分からないお金に手を出すという構図は、ホルン時代から変わっていない。こういう体質を保持している守旧派は一掃しなければ党が持たないと考えるのは当然だろう。

ほんの少し前まで大学教員をしていたヒラーに、この種のスキャンダルはない。

守旧派は一掃されたか

社会党と他の政党と違うのは、人材の豊富さと政治経験。党内No.2の党首代理選挙では、今度は、54歳の党人派セケレシュが302対260で、

どちらかと言えばヒラーに近い44歳のユハースを破り、党首代理に選出された。

2名の副党首には、ユハースとウーイヘイ・イシュトヴァーン（29歳）が選出された。この選挙ではユハースは守旧派を代表し、ウーイヘイがヒラー人脈を代表する形になる。投票数では、ウーイヘイの得票がユハースより少なかった。若手の出しゃばりすぎに代議員たちが警告票を出したというのが、観測筋の解説である。

代議員の投票行動から分かることは、党の顔に政治的経験の少ないヒラーを選出したので、党組織を支えることができる人物を幹部会に選んで、バランスをとった形をとった。幹部会には、セケレシュ、キシユ、ランペルトのいわゆる党人派に加え、国会議員団長のレンドヴァイ・イルディオが入る。彼女も、旧体制から党本部に勤務する党人派の代表格である。少数派とはいえ、いわゆる守旧派と目されている人物4名が幹部会に残った。彼らは政治経験が豊富なだけでなく、他の派閥の政治家ともパイプが太い。大学から移籍したヒラーや若い政治家には相当に手強いはずだ。

今、MDFが党内紛争で右往左往している。MDF創設者の一人で、ダーヴィッド党首と対峙しているレジャーク・シャンドールがMDFと国会議員団からの離脱を求められている。しかし、レジャーク派がMDFを離れると、MDFの国会議員団は事実上、分裂する。

これにたいして、社会党は内部に様々な潮流を抱えながら、その時々勢力バランスに配慮した指導部構成をとっている。MDFのように分裂しない、党の人材と経験の豊富さが社会党にある。日本の自民党とよく似ている。

党本部の掌握

フレッシュ・コンビが社会党の顔になったが、党本部は依然として「守旧派」が握るというのが、新しい指導部構成。文化大臣を兼務しながら、ヒラーが党本部を掌握するのは無理だろう。大学教員から転身したヒラーにとって、これは不可能に近い。

幹部会に占める「守旧派」が4名にすぎないとはいえ、この4名の政治的力量は他の幹部の数倍の力があると考えなければならない。したがって、ヒラーは彼らの助けなしで党組織を掌握することはできないだろう。

もともと、「守旧派」と名付けられるが、彼らも40代から50代前半の若さで、実力を備えた柔軟な思考の持ち主だから、指導部の力関係を単純な構図で描くことはできないだろう。

ポシュタバンクからK&H証券へ

総額1千億Ftの損失を出したポシュタバンクの元頭取プリンツの公判が始まった。国有銀行に政治家と実業家が群がり、銀行資金が気前よく配られたのが、ポシュタバンクをめぐるスキャンダルの本質。損失はすべて国家予算で補填された。これが1990年代前半のスキャンダル。与党も野党もこのお金の分け前に預かったので、プリンツは一度も逮捕・拘束されることなく、公判に臨んでいる。

ポシュタバンクのような便利な国有銀行がなくなっただけで、政治家の資金源泉が狭まった。そこにつけ込んだのがクルチャールだ。国営大企業の投資一任勘定を操作し、政治家の個人投資勘定の損失補填や利益付け替えをやっていたと推定される。現代の錬金術に魅せられた与野党幹部がクルチャールを重宝し、個人資産の運用を任せた。そして、クルチャールはこの人脈を利用して、政治的フィクサーの役割を果たそうとした。その一つがバヤへの贈賄である。

K&H証券のケースでも、クルチャール一派の利益操作や詐取が断罪されることはあっても、個人勘定への利益付け替えで政治家個人が立件されることはない。さらに、政治家への贈収賄も立件されないだろう。とはいえ、社会党は「黒」にちかい灰色政治家を表舞台から外すことで、対応している。現在のハンガリーには、まだ贈収賄という犯罪観念が定着していない。クルチャールも、自宅軟禁に移された。ハンガリー的な曖昧決着への道が敷かれている。

(関連記事は、<http://morita.tateyama.hu>を参照されたい)